

聖書：マルコの福音書 3：20～35

説教題：わたしの兄弟、姉妹、母

日時：2025 年 7 月 13 日（朝拝）

今日の箇所の冒頭に「イエスの身内の者たち」が登場します。そして後半の 31 節以降に「イエスの母と兄弟たち」が出て来ます。これらは同じ人たちを指していると考えられます。そしてこの二つの記事の間に律法学者たちとイエス様のやり取りが挟まれています。このような構成は意図的であると考えられます。そこで今日はこれらの記事全体を一回で見る方が良いと考えて、そのようにさせていただきました。

まず 20 節から見て行きます。イエス様が家に戻ると群衆が再び集まって来ました。このため、イエス様と弟子たちは食事をする暇もなかったほどでした。人々に対応するためだったのでしょう。これを聞いたイエス様の身内の者たちのことが述べられます。彼らはイエス様を連れ戻そうとします。人々が「イエスはおかしくなった」と言っていたからであるとあります。人々は何を指して「イエスはおかしくなった」と言っていたのでしょうか。これまでイエス様に対する反発や敵対が連続して語られて来ました。特にパリサイ派などユダヤ人の指導者たちからのものでした。イエス様はそのような人々と対立し、その怒りを買っているかのようです。その姿を見て「あれは正気でない。気が狂っているのでは」と評価する人たちがいたのです。さらにイエス様のもとに多くの人々が次々に押し寄せ、イエス様と弟子たちは食事もとれないほどでした。そういう状態が精神的に悪影響を及ぼしているのではないかと身内の者たちは心配したのです。「とりあえず彼の活動を一旦やめさせなくては！」「彼を休ませなければ！」「少なくともしばらくは人前に出さないように！」そう考えてイエス様のもとへ向かいました。この行動をどう見るべきかが後半の 31 節以降で明らかにされます。

さて、その間に挟まれているのが 22 節以降のエルサレムから下って来た律法学者たちのことです。彼らはイエス様について「彼はベルゼブルにつかれている」とか「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出している」と言っていました。イエス様によって色々な奇跡が行われていることを彼らも認めざるを得ません。しかしそれを神の力とは認めたくない。そこでその異常な力はベルゼブル、すなわち悪霊どものかしら、言い換えればサタンに由来すると彼らは言ったのです。そんな彼らにイエス様

は答えて行かれます。「どうしてサタンがサタンを追い出せるのですか」。それでは国の中で分裂が起こっていることになる。そうしたらその国は立ち行かなくなる。サタンは自分で自分を滅ぼすという矛盾する行為を行っていることになる。だからあなたがたの批判は当たらない。そしてイエス様は 27 節で「まず強い者を縛り上げなければ、だれも、強い者の家に入って、家財を略奪することはできません。縛り上げれば、その家を略奪できます」と言います。ここで言う「強い者」とはサタンのことです。イエス様はサタンが支配していたこの世に來られて、そこで囚われていた人々に救いと解放を与えています。つまりイエス様はまずサタンを縛り上げ、その上で人々を解放しておられます。そのように神の国、神の支配がイエス様において到来していることをこれらのことは証ししています。

イエス様は続く 28～29 節で彼らに強い警告を語られます。「まことに、あなたがたに言います。人の子らは、どんな罪も赦していただけます。また、どれほど神を冒瀆することを言っても、赦していただけます。しかし聖霊を冒瀆する者は、だれも永遠に赦されず、永遠の罪に定められます。」 ここで私たちが気になるのは「聖霊を冒瀆する」罪とは何かということです。これを理解する鍵が 30 節にあります。「このように言われたのは、彼らが、『イエスは汚れた霊につかれている』と言っていたからである。」 問題にされているのはイエス様において悪霊が追い出されるなどの神の国の働きが示されているのに、すなわち神の霊による働き、聖霊の働きが示されているのに、それを汚れた霊の働きだと言っていることです。これは光を闇と言い、善を悪と言う態度です。イザヤ書 5 章 20 節：「わざわいだ。悪を善、善を悪と言う者たち。彼らは闇を光、光を闇とし、苦みを甘み、甘みを苦みとする。」 このような態度を取り続けるなら救いには至りません。神はキリストを遣わし、この方によってどんな人でも救おうとしています。この方を通して赦されない罪は一つもありません。しかしこの方によって示されている光を闇とし、真理を頑なに拒むなら、そこに救いはないのです。なぜならその人は救いに必要な悔い改めと信仰の道を拒むからです。

ですからこれはある一つの罪が聖霊を冒瀆する罪であり、それを犯した人は赦されないという意味ではありません。歴史の中で多くの信仰者たちは、自分は聖霊を冒瀆する罪を犯したのではないか、そのために救われないのではないかと悩んで来ました。しかし聖霊を冒瀆する罪とは悔い改めや信仰へ導こうとする聖霊の働きかけをあくまで突っぱね、拒否することです。30 節で注目に値するのは「イエスは汚れた霊に

つかれている」と「言っていたからである」と継続を表す時制で語られていることです。つまり1回そう言ったらもう赦されない、というのではない。彼らはあくまでそう言い続けました。意図的に、継続的に「イエスを認めないぞ！どんなことが行われても悪魔のわざだと言うぞ！」という姿勢を取り続けていました。そういう態度のことが責められているのです。ですからもし自分が聖霊を冒瀆してしまったかもしれないと不安に感じる人がいるなら、直ちに悔い改めへ進めば良いのです。そういう恐れを持っていること自体、その人はまだ聖霊を冒瀆する罪を犯していない証拠です。イエス様は赦されない罪はないと確言しています。その福音に聞いて悔い改めに進めば良いのです。ある人は逆に「赦されない罪はない」と聞いて安心し、悔い改めないまま罪の生活を続けるかもしれません。その場合、それは聖霊の働きに抵抗し、逆らい続ける聖霊を冒瀆する罪に近づくことです。その道を行かないように！とイエス様は言っています。罪を示されるなら、速やかにイエス様のもとへ行き、どんな罪も赦していただける福音の力と祝福に生かされる者でありたいと思うのです。

さて今の記事を挟んで、イエス様の身内の者たち、すなわちイエス様の母と兄弟たちがイエス様のいるところに到着します。彼らは外に立ち、人を送ってイエス様を呼びました。大勢の人がイエス様を囲んで座っていました。そこに人が来て言います。「ご覧ください。あなたの母上と兄弟姉妹方が、あなたを捜して外に来ておられます。」これに対してイエス様はどのように答えたでしょうか。イエス様は何と「わたしの母、わたしの兄弟とはだれでしょうか」と言われました。ビックリするような答えです。そして続けてご自分の周りにいる人たちを指して「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです」と言われました。これはイエス様の母や兄弟たちにとってどんなに衝撃的な言葉だったのでしょうか。自分たちを前にして「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と問うとは！そして他の人々を指して「わたしの母、わたしの兄弟です」と言うとは！これは今日ここを読んでいる私たちにも少なからず衝撃を与える言葉ではないかと思います。しかしここに聖書の大事なメッセージがあります。

聖書あるいはキリスト教はもちろん親や兄弟を大事にしないのではありません。キリスト教倫理のエッセンスである十戒の第5番目の戒めに「あなたの父と母を敬え」とあります。またイエス様は公生涯が始まるまではガリラヤで両親に仕えて生活されました。また後にご自分が十字架にかけられ、最も苦しい状況にある時も、母マリア

を気かけ、その世話を弟子ヨハネに託しました。ではこのような聖書の他の箇所における言葉と、今日のイエス様の言葉はどのように調和するのでしょうか。その答えは、キリスト教は親を大事に考えますが、だからと言って親や家族に対する義務が一番上に来るのではないということです。先ほど十戒の第5番目に「父と母を敬え」という戒めがあることに触れましたが、あえて言うなら、それは5番目であって1番目ではありません。その戒めに先立つ1～4番目の戒めがあります。それらはすべて神への義務が述べられている戒めです。これは私たちが毎週祈っている主の祈りも同じです。神の栄光に関する祈りが先で、その後で人間の必要に関する祈りが来ます。ですから人間第一、人間中心ではなく、神第一、神中心というのが聖書の根本的な教えであるということになります。

あるいはこう言っても良いと思います。結婚を定め、家族の制度を定めたのは神です。それは神が定めた良いものです。そして言うまでもなく、神はこれらの制度の上におられます。ですからこの上におられる方を押しのけてまで親や家族の声に聞くことを高く持ち上げるべきではない。神に従うという最も大事な原則の下で、親に従うこと、家族を大事にすることが来るのです。ですからもしこの両者がぶつかるなら当然、より優先順位の高い神に従うことが選取られなければなりません。「人に従うより、神に従うべきです」と使徒たちが繰り返して告白した通りです。もし神に従うことと対立することを親が主張するとしたら、それは親に与えられた権威の乱用です。自分が神に取って代わろうとすることです。聖書は決して神に従うことを後回しにしてまで、親に従うようにとか、人間関係を大事にするようにとは言いません。それは本末転倒なことです。

今日の箇所でイエス様の母や兄弟たちは、イエス様の周りに座っていた人々と対比される「外側」にいました。31節で「外に立ち」とはっきり言われています。そういう意味で彼らはエルサレムから来た律法学者たちと同じグループに属します。「内」か「外」かで分けたら「外」のグループに入ることになります。もちろん彼らは律法学者たちと違って悪意は持っていません。むしろイエス様を心配してここまでやって来ました。しかし現実にはイエス様が今していることをやめさせようとしています。彼らは、自分たちはイエスの身内の者として特別の権利を主張できると考えています。ですからイエス様が人々に教えている最中でも、それを中断させ、中に割って入ることができる。イエスはその家族の声に聞いて、今していることをとりあえずやめて、

まず自分たちのところへ来るべきである。そう思っていました。しかしイエス様からすれば、それはイエス様が従事している神の国の宣教をストップさせることです。この声には聞き従うことができません。そこで「わたしの母、わたしの兄弟とはだれでしょうか」とあえて問い直すような言葉を語られたのです。そしてご自分の言葉に聞き、従っている人々を指して言われました。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟です。だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです。」これは一見厳しい言葉に聞こえたとしても、イエス様の母や兄弟たちのためにもなる言葉として、イエス様が語られた言葉だったと思います。

イエス様は「だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです」と言われました。まずイエス様ご自身が父なる神の御心に従って地上に来られて、このように歩んでいます。神の御心を行う人の先頭に立っています。また弟子たちもそうです。彼らもイエス様の言葉に聞き、イエス様の召しを受けて、すべてを後ろに置いてイエス様に従うという神の御心を行う生活へ進んでいます。またここにいた多くの人たちも同じです。それぞれは様々な背景を持ちつつも、ユダヤ人の指導者たちの反対がある中でも、イエス様の言葉に聞くためにイエス様の周りに座ることを選び取っていた人たちです。イエス様はそうした人々こそご自分の兄弟、姉妹、母であると言われたのです。なぜ「父」という言葉がここにはないのかと思う方もいるかもしれませんが。これは32節の「あなたの母上と兄弟姉妹方があなたを呼んでいます」という言葉にイエス様が対応したからであるというのが一つの見方です。すでに父ヨセフはなくなっていたと考えられます。もう一つの見方はイエス様にとって父は父なる神だけであり、これは他の人間には適用されない。だから35節に「父」という言葉はないとも考えられます。イエス様の言葉に聞き、イエス様に従う人は、イエス様と深い絆で結ばれる家族の関係へと導かれます。イエス様が父なる神との間に持つておられる「神の家族」という関係の中に導き入れられます。またその人は同じようにしてそこに導かれたたくさんの家族がいることを発見します。この神の家族はすべての人に開かれています。イエス様は35節で「だれでも」と言われました。イエス様の言葉に聞き、その招きに従って歩む者は、誰でもここに加えていただけるのです。そして永遠に続く神の国における家族の交わりに生きる者とされるのです。

最後に今日の箇所とセットで一つ心に留めておきたいことは、イエス様の身内の者たちは今日の箇所では外に立っていましたが、後にはイエス様を信じる者となったこ

とです。使徒の働き 1 章 14 節を見ると、イエス様が天に上げられた後、聖霊が下るのを待つ間、エルサレムで熱心に祈っていた弟子たちのグループの中に「イエスの母マリア、およびイエスの兄弟たち」がいたと記されています。またイエス様の兄弟ヤコブは後にエルサレム教会の牧師になり、新約聖書のヤコブの手紙を書く人になります。またユダの手紙の著者もイエス様の兄弟ユダです。今日のイエス様の言葉は一見厳しくも思われましたが、この言葉にも導かれて彼らは大切な真理を理解し、天の父を父とするイエス様の真の家族となる特権へ導かれて行ったのです。

私たちも 35 節のイエス様の言葉を心に留めたいと思います。イエス様の言葉を何よりも大切にして耳を傾け、これに導かれて神の御心を行う者、その人こそイエス様の兄弟、姉妹、母です。この恵みにあずかる者たちでありたいと思います。そこで神が造り出しておられる豊かで祝福に満ちた大きな家族の交わりに生きる者とされたいと思います。また私たち自身がこの道にしっかりと歩むことを通して、主が私たちを用い、私たちの大切な人たちもこの祝福に招かれることを願って行きたいと思います。